エミリー・ブロンテの研究

——Selfishness について——

宮川下枝

私は今年又もう一度 Haworth を訪れてみた。

と言っても団体旅行の中をたった一日だけを割いて行ったのであるから，ゆっくりと歩き廻ることは到底出来ないことであったが，二度と訪れることがあろう等とは，夢にも思っていなかっただけに，深い感激であった。この度は London から Leeds 迄は同じ route を取ったが，ここで乗り換えて Keighley には行かず，Bradford 行きの汽車に乗ることにした。ロンドン空港に着くと直ちに日通が渡して呉れた note の中に，「Bradford から Haworth 迄 20km で一寸割高につくが，タクシーで行った方がよいだろう」と書いてあったので，別の道も面白いだろうと素直に忠告に従ったわけである。もうリーズの駅では駅員さんを掴まえては，"What is the platform for Bradford, please?" ときくのも慣れたし，気易くこのブラッドフオードなる駅に着くことが出来たわけであった。ここは Emily の父 Patrick が牧師として赴任し，Charlotte, Emily, Anne の三姉妹も生れた Thornton のまちが近くなのであるからブロンテー家にとっては，ゆかりの地である(1)。汽車を降りて駅前広場をゆっくりと見廻るわす。この地も時間をかけて見て廻わりたいのであるが残念乍ら時間が許されない。何しろロンドンから4時間以上の時間がかかるのであるから朝私の飛行機がヒースロー空港についても，それから市内に入り，キングクロス駅へと急いで手筈を整えたにしても結局目的地に着くのは夕方になってしまう。駅前でタクシーを待つことにする。どんな運転手の車に乗り合わせるかは運命であるが、それが幸いに実に明るい人のよいドライバーであって、又，車

(1) 又，ブラッドフオードは現在では英国一の羊毛製品製産地である。(1)

の走る20kmの道のりが何と美しい村々を抜け，小川の側を走り，荒野の拡りのような処も通りイギリス北部の起伏に満ちた田舎道を満喫することが出来たのであった。Yorksnire 独特のうねりである。

"I wandered down "Brontë Old Road" past "Brontë Place" through Thornton's extended New Estate of prim little villas and flats……(2)

（私は昔のブロンテ通りをさまよい歩いて気取った小さな村や平原のソーントンの広がる地の中のブロンテゆかりの地を過ぎて行った。）とWilliam Clarke はその書 *The Brontës were Here* の中で書いているが，確かに prim 取りすました，という感じであろう。きちんと整った英国らしい村々，又平原，うねる丘を日の燦々と射す中で走り抜けてゆく。愉快な運転手は，"Haworth please," と言った途端『あゝブロンテ姉妹はよく知っているよ。『嵐ケ丘』を書いたのはシャーロットだったっけ？　エミリーだったっけ』等ときいていた。又英国もずうーと天気が悪く六月も雨，七月も雨，八月も寒かったのだが，この頃やっとお天気になり今日はそのうちでも最高なのだと喜んで呉れる。今日は White Lion's Inn に泊るのだと云えば「あゝあの玄関の上に白いライオンの彫ってあるホテルなら知っている。」と言ってくれる。

"Long low moors dark with heath shut in little village where a stream water have here and there a fringe of stunted copse"(3)

（小さな村にとじこめられたヒースの丘のある長い低い暗いムアー，そここゝにあるいじけた雑木林のふちに小川が流れていて，……）
とシャーロットもそのあたりを形容している。

今日は日曜日の午後，而も好天に恵まれて文学巡礼の人達もさぞ多いことだろうと考えていたのだが，果せるかな，車がやがて登り道にさしかかり先年訪れたことのある荒野の真只中に車を乗り入れた時驚いた，驚いた。そこら中に溢れるような人出である。又更に驚いたことは今広野はヘザーの真盛りではないか。満山花と日本では桜の時期に形容するが，まさに丘

中がヒースに掩われている。そして午後4時の日の光をまともに受けてその照り映える様の美しいこと。まさに Breath-takingly beautiful である。息を飲むような見事さ。バイニング夫人も英国で一番美しい花を挙げるなら Heather だと述べていられる。先年訪れた時は八月の初旬であった為，「ヒースはあと二週間です」と言われて口惜しく思ったことであった。それが今はこの真盛り，岩に丘に，紫色に輝いている。まあ見事，まあ美しい。"Oh! beautiful!" 私はそればかりを繰り返えしていた。外に感嘆の言葉を知らない。ここを車が走り抜けてしまうのが実に惜しい。大勢の人々は岩に腰を下ろし，原を歩き廻って自由に楽しんでいる。あああれが Peniston Crag! だ。

"in winter nothing more dreary in summer nothing more divine" (*Wuthering Heights* chapter XXXII)

（冬はこれ程佗びしく，夏はこれ程神聖な所はない。）

とエミリーも描いている。エミリーの大好きであった夏の午後のヒースの丘を私も走り抜けることが出来たのであった。

"A bright frosty afternoon reminds me of summer"（夏を想わせるような晴れた霜の下りた午後）(Chapt.XI) と十一章に於いても彼女は述べているが，余程好きだった夏の荒野であったのだろう。この素晴しい真夏の原の光景を満喫し乍ら，彼女はここに寝そべって空を眺めていたのだろう。あのキャシイとリントンの会話の中に見られる理想の天国なる文もこのような次点に於いて浮んだものであろう。

"He said the pleasantest manner of spending a July day was lying from morning till evening on a bank of heath in the middle of the moors, with the bees humming dreamily about among the blooms, and the larks singing high over head, and the blue sky and bright sun shining steadily and cloudlessly.) (Chapt. XXIV)

（「夏を過す一番いいやり方は，朝から晩まで広野の真中のヒースの土手に寝そべって，峰は花の廻りを眠たげにブンブン飛び廻り，雲雀は僕らの

頭の上を高くうたい廻り，青い空には雲一つなく燦々と輝いているのを見ることだよ。」とリントンは云うのよ。）

だが車は一気に駈け下りてしまう。惜しい。そしてハワースの街へと下り，再び cobbled way 石の坂道を昇って，玄関に白いライオンの彫刻のある，これも兄 Branwell がよく訪れた処であるホワイト，ライオンズインの前で私を下ろしてくれた。実に楽しい三十分間のドライブであった。チップをあげお礼を云って，私は Inn の中に入る。）

翌朝早く私はホテルを抜け出して，教会敷地内の "The Way to the moors" なる標識にしたがって，近道をして又再び昨日の丘まで行って見る。今度は先年通った道と同じ道を進むわけである。。先年ここで非常に感激したのであったが花の真盛りのこの地にもう一度立つことは更に深い感激であった。只少し惜しいことは，朝の光は弱くて昨日の午後のあの日に映える輝くような一面の紫色は見ることが出来なかった。だが今はゆっくり歩いて見て廻ることが出来る。

"I'm sure I should be myself when I once among the heather on those hills." (Chapt.XII)

（あの丘のヘザーの中にもう一度戻れたらもう一度もとの自分になれるわ，）

キヤサリンの病床での憧れは，Row Head に於いてホーム・シックに悩むエミリーの心でもあったのであろう。 that wind sounding in the firs……（もみの中にきこえる風の音ね）エミリーの憧れるのヒース咲く丘の上と，そのなつかしがる荒野の風の音を耳にし乍ら私は一人朝の大地の中に立っているのである。誠に感慨無量！　最大のよろこびであった。エミリーの声がきこえて来るようにさえ思われる。

昨日の人出はあとかたもなく，今この朝の広野は犬の散歩にお伴している英国紳士が一人歩いている位なものである。お願いして先年と同じ場所で写真をうつして頂く。先年のような意気揚々とした思いはないが深い満

足を覚えていた。

朝食後 Museum の開くのを待って早目に出かけた私は，通り道の教会の横側のドアからそっと中に入っている二，三の人達を見かけた。実は先年も時既におそしで教会内に入れず，今度も「礼拝には何時でも御出席下さい」と書いてあるが，礼拝の時間ではなく表戸はしつかり閉されているままに入る術もないと諦めていた処だった。勇躍私はその二，三の人々に続いて会堂内に滑りこむ。中は薄暗く，正面の stained-glass から入る日の光のみ，ロツチエスターとの結婚式に於いて「待った」の声のかかったあのジェーンの立った会堂の中もこのようなものであったろうかと思わせるような雰囲気であったが，なかなか堂々とした立派なものである。この立派な会堂に眼を瞠り，ここで説教した Patrick Brontë, 又その説教をきいていたエミリー達のことを思い浮べ，私もそっと一人席に腰を下ろしてみた。やや暫く其処に坐った後，立ち上って前の方に進むことにする。ひっそりした内部には訪れている人も僅か，二，三人で非常に静かに見入っている。

祭壇の側に行く。立派な講壇を見上げる。そして祭壇の横わき下の床の上に目をやれば，こここそが長い間お詣りしたいと思っていたエミリーのお墓である。ウエスト・ミンスターの寺院の隅っこには確かに Poets' corner があってここに著名の詩人たちが葬むられ，ブロンテ姉妹もその片隅に名を列らねて名誉を博しているのであるが，私は彼女の本当のお墓に行きたかったのである。先年教会墓地の中なのだろうかと丁度其処に通りがかりの英国紳士に尋ねたことがあった。いやいや教会内ですよと教え

IN MEMORY OF
EMILY JANE BRONTË
WHO DIED DEC 19 1848
AGEO 30 YEARS.
AND
CHARLOTTE BRONTË
BORN APRIL 21 *st* 1816
DIED MARCH 31 st 1855.

てくれたが，その折は教会は既に閉じていたのであった。ああ私は遙々この為に来たのだという気がする。柱の間床の上に金のプレートが貼りつけられ上記の文が書かれている。私は膝を折り，その前にひざまずいて長い間祈を捧げた。心静かな満足な思い。

"But I've been as happy musing by myself among those stones, under that old church:,, (Chapt. XXV)

（だが私にとっては，あの古めかしい教会の陰にある墓石の間で，ひとり物思いにふけるのも同じように幸せだった。）

亡き妻の墓の前にただずむ歓びを述べるエドガー，リントンの言葉が頭に浮ぶ。

100年余静かにここに眠るエミリーの息吹きを感じ，そしてその考えに耳を傾けたいと思った。

一体エミリーは心の底では何を考えていたのであろう。善とも悪とも表明せず只ひたすらに人間性を追求したエミリーではあったが，心の中では矢張りこれが悪いことだと考えていたことはなかったのであろうか。先年ここへ来た折 The Brontë Bookshop なる書店で *The Mind of Emily Brontë* なる書があり私を非常に喜ばせた。他の注文した書物と共に日本に送って貰うように頼んで帰ったのであるが遂にその小包は来なかった。此の度も店の主人は私をよく覚えていて「あれは送りました」と言う。何処で迷ってしまったのだろう。エミリーの考えについて読んでみたいのだが，生憎と今その本は手許にないと言う。誠に残念，私は私なりにエミリーの心の奥底を考えてみる外はない。

一体エミリーは自分の考を決して口にしない人だったようである。兄ヴランエルに対するシャーロットと彼女との考え方，態度を比べてみてもよく分る。ヴランウエルに対して多大の期待をかけていた姉シャーロットは彼の挫折に対して非常な失望さえ覚えたようであるが，そしてその堕落してゆく姿には嫌悪さえ覚えていたようであるが，それに反しエミリーは

"Otherwise, she was completely indifferent."

（我関せずの態度をとっていたようである）

His sister Emily, who was at all times closest to him in spirit had been the one member of the family.[4]

（彼女は常に心の中では兄に一番親密で，家族の一員として彼を迎え兄の心が一番よく理解出来たのはエミリーである）

と Clarke は述べている。兄が Black Bull 又 White Lion's Inn で酒に酔いつぶれれば探して連れ帰ったのもエミリーであり，彼の死後その葬式の折の風邪がもととなり三ケ月後彼のあとを追うように死んだのも彼女である。

安っぽい同情も嫌いな彼女は又叱責もしない。全く彼女の小説の中に扱う人物に対する態度と同じである。

だがこのエミリーも総べての悲劇の原因は人間の selfishness にあると考えていたのではあるまいか。批判も説明もしないエミリーの文の中から彼女の本当の心を引出してみたいと思うのである。すべての不幸のもとは selfishness で始る。

エドガーの態度

キサリンの態度

ネリーの態度

イザベラの態度

等から見てみたい。

そもそもこの物語の悲劇の発端はキャサリンの selfishness にあるとエミリーも考えているのであろう。エドガーから求婚されそれを受けるにあたってエミリーがネリーに告げた言葉，"I've given him an answer." (Chapt. IX)　（お受けしたのよ）のあと

"Well, because he is handsome, and pleasant to be with"　(ibid.)

（そうよ，ハンサムで一緒に居て楽しいんですもの。）

というあのネリーへの答え。「それに若くて，金持で」と答えるあたりの言葉にエミリーは一体何を考えているのであろうか。

"It would degrade me to marry Heathcliff now."　(ibid.)

（今あの人（ヒースクリフと結婚したら私は堕落するわ）

なる有名な言葉はもう既に何回も解釈を試みて来た。だがこれはキャサリンの言い訳であって自分を正当化し乍ら利己主義的な行為をしてしまう人間性をエミリーは徹底的に追求しているとの見方もしてみたい。

いまのままのヒースクリフの境遇では彼が余りにも可哀そう。惨めだ。勉強させて上げたい。ヒースクリフの為だとキャサリン自身も思いこんでエドガーを撰んだようである。だが若くて綺麗で金持であるがエドガーを夫と撰んだのには案外，ネリーが腹立たしく思うようなキャサリンの本心が自分には意識しないながらも潜んでいたのかも知れない。

"You killed yourself." とその死際に彼女をせめる激しい強いヒースクリフの言葉こそがエミリーの本心であるととってはいけないだろうか。自分の本心を殺して利己主義な思いに負けたキャサリンをエミリーは許せない。

"Is it not sufficient for your infernal *selfishness*?"

(Chapt. XV) (下線筆者)

（いくら我儘勝手な君だって満足だろうが，）とヒースクリフもキャサリンに云い切っているのはエミリーの本音ととってよいであろう。

自分の本当の心からなる愛の気持を殺してしまったことはヒースクリフには許せない。君の利個主義ときめつける。

"You and Edgar have broken my heart."

（あなた方二人して私の心をひき裂いてしまったのよ。） (ibid.)

と死の病床にあり乍らもキャサリンは決して負けていない。相手が悪いのだと考えていることに対して，何も批判は加えていないが，人間の弱さをよく見抜いているエミリーである。兄ブランウエルに対しても一言の批評もしなかったエミリーであれば説教めいた解説は加えたくないのであろう。

さてキャサリンが病気に到る迄の過程を拾ってみよう。

争い，

三年間の逃避から姿を現わしたヒースクリフとエドガー，リントンの間

に憎しみと嫉妬との争いが始る。ヒースクリフの出現に宇頂天に喜んだキャサリンの幸せも束の間，彼女は二人の間に入って苦しまねばならない。ヒースクリフをなだめようとして部屋で二人で話すのを夫エドガーが立ち聞きしたのを責めるキャサリンの言葉。

"Now all is dashed wrong; by the fool's crawing to hear evil of self, that haunts some people like a demon." (Chapt.XI)

（ところが自分の悪口を聞かずにいられないっていう悪魔みたいな執念にとりつかれたあの馬鹿者のおかげで何もかも目茶苦茶よ。）

自分の夫を馬鹿者とは，ちと手厳しいが人間の利己主義故にすべては目茶苦茶になってしまった，とエミリーが歎いているようである。又これは，リントンの利己主義のせいだと思いこんでいるキャサリーの態度も面白い。

ヒースクリフと自分とは何もやましい話はしていないのに，二人で自分のことを言っているのではないかと気にして立ち聞きするから事は面倒になるのだとキャサリンは怒る。結局は部屋を出て来たヒースクリフとの激しい言い争いとなる。

病気，

二人の男性の争の間に立って心悩ませるキャサリンは食事も取らずに寝こんでしまう。

She fasted pertinaciously, under the idea, probably, that at every meal Edgar was ready to choke for her absence, and pride alone held him from running to cast himself at her feet; (Chapt. XII)

（キャサリンは頑強に断食を続けた。自分が居ない為にエドガーは食事も喉を通らないであろうに。妻の足もとに駈け寄りひざまずいたりしては男の面目がすたれるとでも思っているのであろう。）

と相手の折れることが当然と思っている。又夫エドガーは

with a continual vague expectation that Catherine, repenting her conduct, would come of her own accord to ask pardon, and seek a reconciliation… (Chapt. XII)

（ひょっとして，キャサリンが自分の行いを後悔し，自分から赦しを求め，仲直りにやって来はしまいかという淡い期待を抱きつづけ…）
と相手が謝りに来るのを待っている。お互に利己主義な態度，心の構えようである。

自分が臥っていてはどのように夫が淋しがるであろう，迷惑をかけるだろうか等とは豪も考えず，唯自分のことを心配しているだろうとだけ考える人間の余りにもありのままの姿をエミリーは描いている。

それだからと言って丁寧に事情を相手に説明してあげるネリーでもない。夫エドガーはただ静かに本に読み耽っているだけであるときいたキャサリンの憤り。

"among books and I dying! Cannot you tell him?" (ibid.)

（私は死にかけているのに，本の中にうずもれているの？，そう言って。）

"How dreary to meet death, surrounded by their faces! (ibid.)

（みんなの冷い顔に囲まれて死ぬのって何て淋しい気持かしら？）

相手を怨む利己主義なおもいはつのって行く。自分の死とは関係なく生きてゆく人の冷さをも怨んでいる。

"Isabella, terrified and repelled, afraid to enter the room, it would be so dreadful to watch Catherine go." (Chapt. XII)

（イザベラは恐くて部屋にも入って来ないし，私が死ぬのを見るのは恐いのでしょ。）
とキャサリンの絶望の叫びは続く。

"and Edgar standing solemnly by to see it over; then offering prayer of thanks to God for restoring peace to his house and going back to his books.!"

（エドガーはもっともらしい顔をしてそばに立ってあたしの死ぬのを見届けると，この屋敷に再び平和をもたらして下さった感謝のお祈りを捧げ，そして又本のところへ戻って行くの？」人々の利己主義振りを歎くあたり，エミリーの深い悲しみが読みとれるようである。

そして頑強に絶食を続けたキャサリンの病はいよいよ重って行くのであるが，この病の床にだけはヒースクリフは万難を廃しても出かけねばならぬ，チャンスをつくってくれとネリーに執ように迫る結果としての先述の場となるのであるが，その折ネリーが相手を決めつける言葉が面白い。

"I urged the cruelty and *selfishness* of his distroying Mrs. Linton's tranquillity for his satisfaction (Chapt.XIV)（下線筆者）

（それに自分の満足の為にキャサリン奥さまの安静をかき乱すことは残酷だし，身勝手だとはっきり決めつけてやりました。）

なかなか興味深い言葉である。身勝手な言語，行動の多いネリーがヒースクリフに向ってあなたは身勝手だと言っている。

だがヒースクリフにしてみれば，キャサリンの安静をかき乱す等とは，夢にも考えられないのである。自分の1/100の愛の力でしか彼女を愛することの出来ぬ男にキャサリンの最後を任せることは出来ない。どんな危険を冒しても死を前にした彼女の処にとんで行かなければ。そして彼女の愛をも確め，自分の本当の気持も見せなければ。見せかけの親切はヒースクリフには許されないのである。兄ブランウエルの為には酒場迄も彼を連れに行ったという真実のエミリーの愛の姿がこのヒースクリフの中には見られるではないか。それをネリーはあなたの selfishness（利己主義，身勝手さ）だという。だが果して人間としてどちらが真の姿と考えるべきであろうか。

ネリーの利己主義

すべてに輪をかけたような利己主義な姿はネリーに於いてよく描かれている。

"I could not pursue them, however, and I dared not rouse the family and fill the place with confusion; still less unfold the business to my master,..." (Chapt.XII)

キャサリンの病気で家中が大騒ぎをしている時の事である。ネリーは鉄条網にかかる犬の死骸を見る，不審に思って二階に上ってみると大事なお嬢さまの寝床はもぬけの空である。

（だが私は後を追うことは出来ません。家中を起して大騒ぎさせる気にもなれません。ましてやだんな様にどうして打ち明けられましようか）
とイザベラの家出を知り乍らも，主人にその重大事を知らせようともしない。如何にも人の為を思ってしていることであると，自分には思いこんでいること乍ら，実はこの上ない利己主義なやり方である。自分が騒ぎをひきおこす当事者にはなりたくない。くさいものには蓋をしろ。直ちに御主人様に知らせていれば，皆で後を追うことも出来たであろう。みすみすイザベラの運命を破局に追いやったのも一人の女の利己主義が大いに関係している。

だがこのネリーは自分の態度を反省することはない。自分は常に正しいことをしたと信じているのであれば，自分が正しい。そしてキャサリンは我儘勝手で困ると考えている。

"I blamed her."　(Chapt. XIV)

（私は彼女を責めました。）
駈け落ちの二人は既に嵐ケ丘に戻って来てイザベラは惨めな人妻の生活を送っている。そこへネリーが訪れてエドガーの伝言をヒースクリフに伝えるのだが，キャサリンの病状をヒースクリフからきかれるままに話す場合にも「奥さまがいけないのですよ。皆御自分からもたらしたことですね。）と平然と云ってのける。そして「あなたはよきにつけ，悪しきにつけ，あちらの家庭に干渉なさるのはおよしになった方がよいですよ」と釘をさす。

"You must not: you never shall, through my means."

(Chapt. XIV)

"Your stubbrn ill nature,"　(Chapt. XIV)

（お前の強情ないじ悪）とキャサリンはネリーを叱責している処があるがこれはエミリーの本心ともとれる。

もともとブロンテ家に長い間いて一家の世話をした女中 Tabitha Aykroyd は大変気さくな親切な Yorkshire 育ちの人間で子供達にその周辺の物語りをよくきかせてくれた人のようであるから，Nelly のような人物をエミリーが考え出したのは不思議であるが，人間本来の姿がこのネリーの

中に見出せるようで面白い。

ことネリーの selfishness に至っては枚挙にいとまがない程で，これはもう今更改めて書くにも及ばないであろう。自分の利己主義は棚にあげて "You traitor!" (裏切り者)，と叫ぶあたり私が何度も述べて来た自分の利己的な我儘な態度には少しも気づかずに他人だけを互に我儘，利己的だと責め，而も自分は他の為によかれとやっているのだとの自己安心だの，又自分のしていることが正しいのだとの自個弁護の姿をエミリーは人間の中に鋭く見抜いているのだと考えると非常に興味深いものである。一点の説明も加えないからこそ，エミリーの述べる言葉は興味があり，一片の批判も加えないからこそ，彼女の言葉には重みがある。静かに彼女の墓前にぬかずきつつ，彼女の真に考えていることがききたいと思う私の心にきかされた彼女のおもいはこのようなものであった。

父が Leeds から求めて来た人形を皆で自分のはこれだと撰んだ時，エミリーの取り上げた人形を評して姉シャーロットは，妹は彼女そっくりの a grave-looking fellow だと言っている。たしかにエミリーはgrave-looking であったであろう。又ギャスケル夫人の評するように

"Emily a tall long armed girl extremely reserved in manner."

(極端に控え目な背の高い腕の長い少女) は，この教会内の墓に静かに眠っているのである。

*　　*　　*　　*

今は museum となっている牧師館も又入って見た。今日は長蛇の列である。今でも昔と変らず入場料20ペンスであるところが英国らしい。これは既に述べたところであるから重複する必要もないであろうが，今回私の興味をひいたのは，庭の塀の丁度真中あたりが一角別の石がはめこまれ何か記されている。近づいてみよう。先回は全々気が付かなかったところだ。

(教会へと続くこの用地の門はブロンテー家によって使用された。教会内の彼等の最後の休息地に運ばれたのもこの門を通ってである。)

成程，自分の家の門から出てぐるりと廻って教会の正門に行けば大廻り

This was the site
of the gate leading
to the church used by
The Brontë Family
And through which they
Were carried to
Their final Resting Place
IN THE CHURCH

になる。家族はここを抜けて近道をして教会へ行っていたのか。そしてブランウエルが，そっと父の眼をしのんで Bluck Bull へと抜け出していたのもこの通り道なのか。この近道を通っても教会と牧師館は可成り離れているのだから雨の日，雪の日は家族の者には一寸した道のりであったことであろう。

又牧師館で新たに気付いたことは二階の通路のような一角にブランウエルの描いた肖像画が沢山に並べてあることであった。先回私は Show-case の一つ一つに眼をくっつけるようにして長い間その前に立ち止り，読んでいたのであるから見落しはないと思っていたのであるが，もう全部くまなく見てしまったという安心感からか，この最後の部屋は頭に残っていなかった。ブラッドフオードの街で彼が肖像画家として仕事をした時色々な人に頼まれて描いたものであろう。否お客様になってもらったのだろう。ギヤスケル夫人に云わせれば，

"Not much better than sign-painting so as its manipulation"(5)

（看板にも劣るような下手くそな絵，筆さばき，）ということで，確かに誰の顔も同じように見えてそう上手なものでもなかろうが，これ程の仕事をしたブランウエルが辛抱して大成出来なかったことは返えす返えすも残念なことである。William Clarke も 'crude paintings'（粗雑な絵）と述べている)(6)

最後部の売店では今度こそここで賑売しているスライドを求めることにする。残念乍ら私の来た日は二日ともがイギリスの bank holiday とあっ

て，ロンドン空港で change した以外はポンド（イギリス紙幣）に交換する術はなかった。そしてこの田舎では rate を知らないからと言ってドルでは売ってくれなかった。私は用意しただけのポンドで汽車賃もホテル代もタクシー代もまかなわねばならなくなってしまった為に，スライドもぎりぎりしか求められない。

外に出る。この小さな村に大勢の文学巡礼として訪れている人達の為に警官が巡羅している。宿泊した White Lion's Inn も Lunch is now serving と看板を出しているが満員の盛況。とても入る余地はないようだ。ロンドンへは時間がかかる。夕方迄には皆と合流しておかねば明日の出発を控えているだけに心配だ。いよいよ日本に帰えるのだ。タクシーを呼んで貰う。

今度は Keighley 駅に出ることにしよう。一度通った通はなつかしい。タクシーは途中で Oxenhope というリーズから Haworth 迄のローカル線の走る駅の前も通る。郵便局もある。ああ思い出深いキースレーの駅だ。汽車は五分でリーズへ向け出発するという。幸運。

工場地帯を抜けて来たような Bradford の鉄道とは違ってこのキースレーからリーズ迄の線は小川に沿った平野の美しい線である。始めてこの線に乗った時は実に不安であったが私は今回は故郷に戻ったような気安さを覚えつつリーズ，そしてロンドンへと向ったのである。

* * * * * * * * *

なおこれを脱稿してしまって後のことであるが神戸にお住いの大学教授より，ハワーズで本屋の主人に *The Mind of Emily Brontë* なる本を日本の私に渡して呉れと伝言で預りましたのでその方の荷物が着き次第，後日お送りしますとのおハガキを頂き，大いに気をよくして，次号にはそれについて述べることが出来ると楽しみにしている次第である。

註

(1) Carry Lyle: Let's Visit England p. 29

(2) William Clarke: *The Brontës were Here* p. 42

(3) 〃 〃 p. 42
(4) Phyllis Bentley: *The Brontë and their world* p. 85
(5) William Clarke: The Brontës were Here p. 77
(6) 〃 〃 p. 48